

【論文】

# 「自己調整学習の循環的段階モデル」を組み込んだ 幼児教育「表現」領域の模擬保育の 教育的効果について

橋 本 忠 和

## 要旨

今日、AI 技術の発達や保育無償化など幼児教育を取り巻く環境の変化を前向きに受け止め、教職生涯を通じて探究心を持ちつつ自律的・継続的に保育に関する新しい知識・技能を学び続け、幼児一人一人の育ちを最大限に引き出し、その主体的・協働的な活動を支援する能力・姿勢も備えている保育者が求められている。本研究では、保育者を養成する場として模擬保育に着目し、そこでの学生の能動的な保育実践力教科の取組を支援する学習過程を構想・実践・検証することを目的としている。そこで、幼児教育「表現」領域の指導法を学ぶ学生の「模擬保育」の学習過程に、既に子どもと大人の主体的・自律的な学びに効果があるとされる Barry J. Zimmerman らの「自己調整学習の循環的段階モデル」を組み込むこととした。そして、園田学園女子大学短期大学部で、その模擬保育を実践し、その中で「創造的思考を育む指導上の留意点」や「自己調整学習を構成する要素の自己効力感」を評価項目に組み込んだ事後アンケートを行った。それを元に模擬保育の教育的効果を分析し、その成果・改善点を考察した。その結果、学生が模擬保育のプロセスを予見・遂行・内省する際に「子どもから学ぶ」と、子ども本位に考え・行動する意識が高まっていたことが分かった。

## 1. はじめに（模擬保育の必要性と自己調整学習）

令和 4 年 12 月の中央教育審議会による「『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～『新たな教師の学びの姿』の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～(答申)」(以後「答申」と表記)では、今後の教育を担う教師の養成・採用・研修等の方向性について、教師が自身のこととして学校教育を取り巻く環境の変化を前向きに受け止め、教職生涯を通じて探究心を持ちつつ主体的に学び続けること、一人一人の教師の個性に即して学校現場の課題に対応するための個別最適な学びや、教師同士の学び合いなどを通じた協働的な学びを行うことなどを求めている<sup>1)</sup>。(下線筆者)ただ、学校教育現場においては、従来どおり授業研究を中心とした校内研修は盛んにおこなわれてきた。それを裏付けるように、OECD が実施する「国際教員指導環境調査」では、日本では研修として他の教師の授業を観察し、感想を述べ合う授業研究を実施している教師の割合が高く(日本 93.9%、参加国平均 55.3%)、他校で実施される授業研究に参加する教師の割合も高い(日本 51.4%、参加国平均 19.0%)

ことが指摘されている<sup>2)</sup>。すなわち、日本の教師は、日ごろから同僚と協働で学び合い、子どもにとって分かりやすい授業を目指して指導技術の向上を図ってきたといえる。

一方で、幼児教育における保育士養成に関連して、保育教諭養成課程研究会の「平成 27 年度文部科学省委託 幼児教育の質向上に係る推進体制の構築モデル調査研究『幼稚園教諭・保育教諭のための研修ガイドⅡ－養成から現場への学びの連続性を踏まえた新規採用教員研修－」（以後「研修ガイド」と表記）では、幼稚園教員養成課程と新規採用教員の間にある新採ギャップを把握するため、幼稚園新規採用教員（716 名）と 4 年制大学・短期大学に在学する修了間際の養成課程学生（157 名）の 873 名を対象にアンケートとインタビュー調査を実施し、保育者効力感、保育実践力、職務上の困難（学生については就職後のイメージ）を調査した。その結果、教育・保育の困難感、業務量の負担感に関して養成校学生のイメージより新人新採の方が高く感じていた。一方で人間関係の困難感は、新人新採が実際に経験するものよりも、保育者養成校の学生が事前に抱いているイメージの方が強く表れており、学生の段階で既に高い困難感を持っていることが報告されている。そして、新規採用教員は幼稚園教員養成課程学生に比べて保育者効力感、保育実践力の自己評価が低いことが調査結果から明らかになったとしている<sup>3)</sup>（下線筆者）。

ここで気になるのが業務になれない新人の業務量に対する負担感への軽減もあるが、その効力感と実践力への自己評価の低さである。その意味において報告書が新任研修の重要性を指摘するのも頷けるが、養成段階においても、その低さを解消し、尚且つ、人間関係の困難感への不安を和らげる手立てを行う必要があると思われる。さらに「研修ガイド」では、新人新採は在学中に学んでおけばよかったこととして指導方法・指導技術を挙げ、学生は関係づくりを挙げている<sup>4)</sup>。したがって、養成段階の大学では、「研修ガイド」の指摘を配慮して体験的に指導方法・指導技術を他者と協働して学べ、そのプロセスを通して自己効力感を高めることができるアクティブラーニング型の授業カリキュラムを展開する必要があると考えられる。

この授業カリキュラムに関連して桐川敦子らの研究グループは、学生が保育者役または、子ども役を行い、運動遊びをテーマに模擬保育を行うといったグループワークを取り入れた授業を調査し、学生の体験を明らかにし、その効果および課題の検討を目的とした研究を行っている。ここでは学生が子ども役や保育者役を行う模擬保育において下記の点の効果があるとしている。

- ・学生たちが模擬保育を成立させるため、子どもの立場を考える試み（子どもから学ぶ）を尽くしていた。

- ・保育者として必要な『探求する』姿勢を体験的に学び得ることが可能な場になっていた。

そして、上記のことから模擬保育は保育者になってから大きく役立つものを得られることが予測されるとしている<sup>5)</sup>。これは「答申」において「多くの有為な人材が、教師として、教職生涯を通じて学び続け、子ども一人一人の学びを最大限に引き出し、主体的な学びを支援する伴走者として教育に携わることができる」<sup>6)</sup>保育者像に必要な「子どもの立場を考える（子どもから学ぶ）意識」や、教職生涯を通じて「子どもの学び引き出す保育」を探究する姿勢を養う可能性を模擬保育が有していることを示していると思われる。

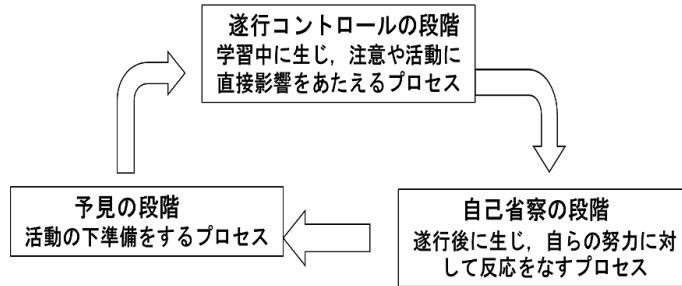


図1 自己調整学習の循環的段階モデル<sup>7)</sup>

この先行研究で効果があるとする将来の保育者を目指す学生の「子どもから学ぶ」「探求する」姿勢を高めると共に、その主体的な保育実践力の取組を支援する授業プログラムを構想・実践するため、本研究では、子どもや学生の主体的・自律的な課題解決を支える学習プロセスとして注目されている Barry J.Zimmerman らの「自己調整学習の循環的段階モデル」（以後「循環段階モデル」と表記）（図1）に着目した。

その理由として彼らが「学習者たちは自分たちの目標を達成するために体系的に方向づけられた認知・感情・行動を自分で始め続ける諸過程<sup>8)</sup>とする自己調整学習の理念は「探究心を持ちつつ主体的に学び続ける」教師像に通じると思われるからである。また、相互に関わりを持ちながら自己調整学習を支えている要素として Zimmerman が挙げている「自己調整学習方略」、「自己効力感」、「目標への関与」に関連して、伊藤崇達<sup>9)</sup>がその要素間の関係を学業上の目標の達成に向け、自己調整学習方略を適用した。その結果として遂行レベルが高まれば自己効力感も高まるとする指摘は<sup>9)</sup>、先の新規採用教員の低い自己効力感解消になると考えられる。

そこで、Zimmerman らの「循環的段階モデル」を幼児教育「表現」領域の指導法を学ぶ学生の「模擬保育」の学習過程に組み込むこととした。そうすることで、「子どもから学ぶ」や「主体的に探究する」姿勢と共に、指導方法・指導技術、他者との関係づくり、さらに自己効力感の向上が図れることを期待した。そして、それを明らかにするため、「循環段階モデル」を組み込んだ模擬保育の学習活動を園田学園女子大学短期大学部の保育内容（演習）造形表現の授業において実践した。そして、その中でミッチェル・レズニックの子どもの創造的思考を育む指導者へのヒント（指導上の留意点）を軸に学習者のための10のヒントを組み込んだ選択式アンケートや Zimmerman が自己調整学習支えている要素とする自己効力感の評価項目を組み込んだ事後感想アンケートを行い、それを元に「自己調整の循環的段階モデル」を組み込んだ模擬保育の教育的効果を分析し、その成果と今後の改善点を考察することとした。

## 2. 自己調整の循環的段階モデルとは

ここでは、本研究で模擬保育の学習プロセスに組み込んだ「自己調整の循環的段階モデル」のベースとなる自己調整学習の内容及びその循環的段階モデルを構成する各要素とその成果を読み

取る評価項目について述べる。

## 2-1 自己調整学習とは

令和3年度「幼児教育の教育課題に対応した指導方法等充実調査研究－幼稚園における指導の在り方等に関する調査研究－『幼児教育を担う教員に求められる資質・能力を高める研修モデルの開発』（以後「研修モデルの開発」）では、「答申」で示された「これからの教員に求められる資質・能力」と幼児期の教育の特質を踏まえて、幼児教育を担う教員に求められる資質・能力について A から G の下記の7つの視点を示している。

- A. 幼児理解を深め、一人一人に応じる資質・能力
- B. 保育を構想する資質・能力
- C. 豊かな体験を創り出す資質・能力
- D. 特別な配慮を必要する子どもを理解し、支援する資質・能力
- E. 他と連携し、協働する資質・能力
- F. カリキュラム・マネジメントの資質・能力
- G. 自ら学ぶ姿勢と、教師としての成長（リーダーシップを含む）<sup>10)</sup>

この視点の内、木村昭憲が Zimmerman らの研究から「学習者が見通しを立てて、学習したことを振り返り、調整しながら学ぶ学習」<sup>11)</sup>（下線筆者）と紹介している自己調整学習は B の「保育の構想」や C の「豊かな体験を作り出す」及び F のカリキュラム・マネジメントに通じる点があると思われる。さらに、Zimmerman が「自分たちの目標を達成するために体系的に方向付けられた認知、感情、行動を自分で始める続ける諸過程」<sup>12)</sup>（下線筆者）とする解説からは、E の「他との連携」や A の「幼児理解」、G の「自ら学ぶ姿勢」に共通する点が見受けられる。

したがって、Zimmerman が、「自己調整の学習者たちは、学習を与えられたものではなく、自分でやり遂げるものとしてみている特徴をもつとし、その学習をメタ認知的過程はもとより、自発的動機づけと行動の過程を必要とする積極的活動を行う」<sup>13)</sup>とする自己調整学習を模擬保育に組み込み学習活動を展開することは、学生が幼児理解を土台に魅力的な保育を構想し、他者と目標を共有して実践を展開し、省察することを可能にする一つの手だてと考えられる。

そこで、この自己調整学習の模擬保育における捉え方を整理する必要がある。まず、自己調整の定義について、塚野州一は、Reeve.j. らの「人々が自分の資質、すなわち思考や情動、行動、社会的文脈的な環境を将来望ましい状態に調整させていく中で、体系に管理するプロセス」<sup>14)</sup>という内容で合意が見られ、先の Zimmerman の「教育目標の達成を目指して学習者自らが創り出す思考、感情、行為」が広く認知されているとする<sup>15)</sup>。

そして、彼は、自己調整学習については目標設定・方略利用・自己モニタリング・自己調整等が重視される Zimmerman の下記の説明がその定義とされているとする。

「学習者が学習過程に、メタ認知、動機付け、行動に積極的に関与する学習である。」<sup>16)</sup>

この定義から自己調整学習は学習者がメタ認知、動機付け、行動で構成される自身の学習過程

に主体的に働きかけることと捉えられる。伊藤は、各要素ついて下記のように説明している。

- ・「メタ認知」= 自己調整学習者が学習過程の様々な段階で計画を立て、自己をモニターし、自己評価していること
- ・「動機付け」= 自己調整学習者が自分自身を、有能さ、自己効力、自律性を有するものとして認知していること
- ・「行動」= 自己調整学習者が学習を最適なものにする社会的・物理的環境を自ら選択し、構成し、創造していること（下線筆者）<sup>17)</sup>

この伊藤の解説と、幼児教育を担う教員に求められる資質・能力との関係性を整理すると、図2のようになる。この関係性は、後の実践分析の際の学生の模擬保育での自己調整学習による教員に求められる資質・能力の育成の様子を見とる際と、授業指導者である筆者の授業展開・指導の効果と改善点を見出すのに役立つと思われる。すなわち、この自己調整を学習で成立させるのは、「メタ認知・動機づけ・動機付け」の3つの構成要素を学生自身が能動的に進めていく学習環境を構想・実践する必要があると考えられる。

現職小学校教員の嶋田祐らは、「自己調整の効果的な学習方法を使えば、どんな生徒も‘優れた学習者’になる力を持っている。」<sup>18)</sup>という自己調整学習を「よりよい授業をしたい」という教師の潜在的な思いを具現化する校内研修に導入し、実践を展開するため、Zimmerman や伊藤の考え方を参照に、この学習を「学習の見通しをもち、学習を展開していく上で自分の状態を客観的に捉え、自己効力感を動機として目標達成のために改善を繰り返す姿」捉えている。そして教師の資質向上が子どもの教育の充実に直結し、その「教師の学び」が子どもの学びのロールモデルになるとして、その「教師の自己調整学習」の概念を下記のように意味づけしている。

「積極的に自身の授業づくりを省察し、明日の「よりよい授業」を目指す意欲をもちながら、新たな知識・技能を学び続けるための方略を実行していくこと」<sup>19)</sup>

本研究は、図2や嶋田らの意味付けを参考に以下のように保育養成学生における自己調整学習を捉えることとする。

「積極的に自身の模擬授業や保育実習での経験を省察し、就活後の『よりよい保育』を構想し、創造する意欲をもちながら、幼児理解を深め、新たな知識・技能を学び続けるための方略を実行していくこと」

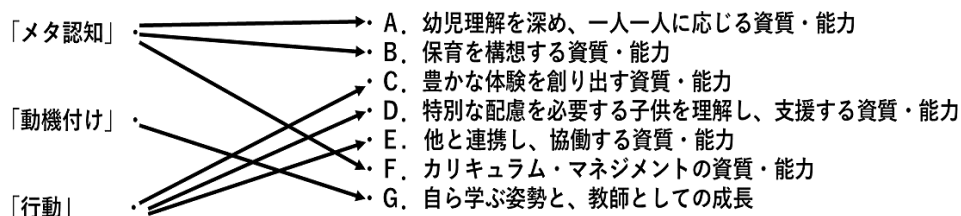


図2 自己調整学習の構成要素と幼児教育を担う教員に求められる資質・能力との関係性

## 2-2 自己調整の循環的段階モデルと、導入することで期待できる教育的効果

Zimmerman は、学習を身体的（認知的と情動的）、行動的、文脈的要素を含む多次元の過程と捉え、その学習スキルに習熟するために学習者は文脈的に関係のある場面の課題に対して認知的方略を行動の上で使用しなくてはならないとし、そのため学習は繰り返しの試行を必要とする<sup>20)</sup>。そして、その自己調整学習での繰り返しの試行は、下記の3つの循環的段階に分割されるとしている。

○「予見段階」：実際の遂行に先行するもので、活動の下準備をするプロセス

学習者は何らかの目標をもっており、また、目標を成し遂げることに對する自己効力感や課題についての興味の程度は様々である。ここで、どのように学習を進めていくかについて計画が立てられる。

○「遂行段階」：学習中に生じるプロセス

注意や活動に直接影響を与えるプロセス。遂行がうまくなされるように注意の焦点化、自己教示、自己モニタリングが行われる。

○「自己内省段階」：遂行後に生じ、自らの努力に對して反応をなすプロセス

その結果は、次の「予見」の段階に反映され、循環的プロセスが成立していく<sup>21)</sup>。

図3は、伊藤が、Schunk & Zimmerman (1998) の研究を元に、その学習サイクルの段階を明示し、下位過程を関係づけたものである。また表1は、その各下位過程の内容を Zimmerman の説明を参照に整理したものである。この学習サイクルを参照に、学生による模擬保育の準備・展開・まとめの学習活動を構成し、その成果を読み取っていくようにする。

また、伊藤は、Zimmerman & Schunk (2001) の研究を元に、自己調整する力が4つのどのレベルに沿って発達していくか表2に整理している。そこでは、初めは社会的な起源（観察レベル・模倣レベル）から発達し、時間の経過とともに自己を起源（自己制御されたレベル・自己調整されたレベル）とするものに変化いくものと考えられているとされている<sup>22)</sup>。この4つのレベルを学生の模擬保育の取り組みが、どの自己調整の程度であったか考察する際に役立てるようにする。そうすることで、先の自己調整学習の活動プロセスのどこに課題があったのかを把握し、自身の造形演習の授業の模擬保育学習の取り組みの改善点が見えてくると思われる。この点にお

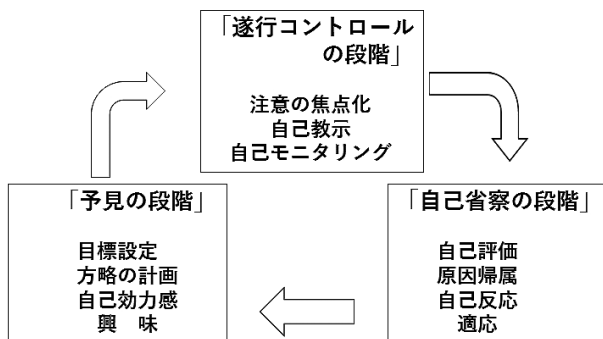


図3 自己調整学習における3段階の過程<sup>23)</sup>

表1 自己調整学習の循環的段階と下位過程の内容<sup>24)</sup>

計画	目標設定	学習の具体的な成果を決める。
	方略の計画	希望する目標を達成するために計画された学習方略や方法を選択する。
	自己効力感	ある計画されたレベルの学習あるいは遂行能力についての個人の信念（自己効力感のある生徒は高い目標を設定し、効果的な学習方略を選びやすい。
	興味	内発的興味をもつ学習者は、具体的な報酬がなくても学習の努力を続ける。
遂行または意志的制御	意見の焦点化	学習者の学習者の気持ちを、気を散らすことと競争意識から守らなくてはならない。
	自己教示	自己指導とは、数学の問題を解くときのように学習課題をどうすすめるかを自分に教えること。イメージは学習と再生を高める技法、幼児の子どもが学習したり記憶したるすることを支援するためにモデリングの系列イメージを使う。
	自己モニタリング	学習者に進行状況（あるいはその遅れ）を教える。しかし、方略的実行過程を妨害する。基本的な過程や結果に対する自己モニタリングを制限することをすすめる。スキルが獲得されると意図的モニタリングをあまり必要としなくなる。
自己内省	自己評価	間違ったテスト項目のフィードバックを評価するように、自己モニターした情報を何らかの基準や目標を比べる。
	原因帰属	自己評価は出来ない遂行は限られた能力か不十分な努力のせいとするような結果の帰属につながる。自己調整の出来る学習者は失敗を修正できる原因に帰属させ、成功をコンピテンス（社会性）に帰属させる。方略帰属は、学習の間違いの原因を特定し、遂行を向上させるのに役立つ
	自己反応	成功と失敗を方略使用に帰属することはプラスの自己反応に関係している。結果を能力に帰属することはマイナスの自己反応に関係している。
	適応	自己調整できる学習者は遂行をよりの確に評価するので、さらに適応的になる。

表2 自己調整する力の発達の4つのレベル<sup>25)</sup>

発達のレベル	社会からの影響	自己からの影響
観察的レベル	モデル・言葉による説明	
模倣的レベル	社会的ガイダンス フィードバック	
自己制御されたレベル		内的基準・自己強化
自己調整されたレベル		自己調整的なもの 諸過程・自己効力感 信念

いても自己調整の循環的段階モデルで模擬保育の学生の学習プロセスを構成し、実践し、評価することは、大学教員の授業改善の方向性を可視化できる利点があると考えられる。

さらに、学生を対象とした自己調整学習のあり方を研究している Linda B. Nilson は、自己調整学習で高められる以下の点について、多くの証拠が蓄積されてきたとする。

- ・ 授業や授業の単元における学生のパフォーマンス／達成度
- ・ 学生の思考の量の深さ
- ・ 自分の学習に対する意識的な集中
- ・ 内省的で責任感を伴う専門意識の発達<sup>26)</sup>

本研究においても、この4点の先行研究における自己調整学習の利点が、循環段階モデルを組み込んだ学生の模擬保育で見られるかどうかについて成果を考察する際に明らかにしたい。

### 2-3 自己調整学習モデルを組み込んだ幼児教育「表現」領域の模擬授業における学生の変容を読み取る評価項目とは

幼児の表現領域の目標には「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」<sup>27)</sup>とある。そこにある「創造性を豊かにする」に関連して、ミッチェル・レズニックは、遊びながら多くを学ぶ幼稚園の子ども達が、創造的なプロセスについて学んでいること、そして創造的な思考者として成長し始めることが、最も重要なこととしている<sup>28)</sup>。そして「創造性が根を張り、成長し、豊かに実る肥沃な環境を作り出す」支援として以下の「親と教師のための10のヒント（アイデアを喚起する例を見せる・突き回すことを推奨する・幅広い材料を提供する・あらゆる種類の作り方を受け入れる・プロセスを強調する・時間はたっぷりと・仲介人の役割果たす・コラボレーターとして参加する・振り返りの質問をする・自身の振り返りを共有する）」<sup>29)</sup>を提案している。さらに彼は、「創造的な学びを行うために学習者に示した10のヒント（シンプルに始める・好きなものに取り組む・とにかくいじりまわす・実験する・アイデアを友達と分かち合う・他のものをコピー・アイデアを記録する・構築-分解-再構築・こだわりすぎない・学びのヒントづくり）」<sup>30)</sup>も示している。

これらのヒントの背景には、子どもが創造的な社会で生きることを助けるため、自分の関心を追い求め、アイデアを探究し、自分の声で語る機会を確実に手にすることができるようにするという価値観<sup>31)</sup>があるとされる。その、「追い求め、アイデアの探究、自分の声で語る」等の姿勢は、子どもの積極的なメタ認知的過程、自発的動機づけ、行動の過程の学習活動への支援を重要視する Zimmerman らの姿勢にも通じ、参照することで幼児の創造性を引き出す模擬保育のプロセスで学生の自己調整力を読み取り、高める際に役立てることができると考えた。

そこで、教師のヒントを軸に重複するものは整理し、学生が保育実習等で、発想や創作を活性化するため「できることから始めるようにすることを学んだ」と述べていたことなどを参照に、以下の13の質問項目で事後アンケート（図4）を作成した。（★印は学習者へのヒント、●は教師へのヒントから引用、「 」内のアルファベットは図2の関連する幼児教育の教員に求められる資質・能力をさす）

- ①発想：題材や作品例から出来事をイメージすることを喚起する例を見せている●「C」

サンプルとなるプロジェクトを最初に見せることで、「何ができるのか」についての感触を与え、「どこから手をつければいいのか」のアイデアを提供する。

- ②創作：シンプルなことから、作ることをすすめている★「C」

シンプルなものから始めて、それをテストし拡張と改良を繰り返す。

- ③創作：好きな道具（画材等）や材料を選ばせ取り組んでいる★「A・C」

気にかけているプロジェクトに取り組むとき、人より長く、より激しい作業をこなし、その挑戦の前に諦めない。同時に新しいことを学ぶ意欲も手にする。

- ④発想：自由に材料を沢山、いじくり回すことを推奨する●★「C・D」

プロジェクトのアイデアを生み出すのを助けるには、子どもが材料をいじくり回すことを推

奨励する。好奇心の赴くままに進めることで、最終的に新しい目標と計画が生まれる。

⑤創作：何度も何度も失敗し、試してみることを促している★「A・C」

創造的思考者になるためには積極的に実験をしたり、新しいことを試みたり、従来の知恵を無視したりする必要がある。最初から上手くいくと期待せず、何度も試させる。

⑥創作：躓いたとき幅の広い種類の素材や作例等アイデアを提供している●「A・C・D」

作るものに応じて、適した材料がある。マテリアルの多様性が多いほど、創造的な学習活動が生まれる。

⑦共有：友だちとの創作に積極的に参加できるように促す●★「E・D」

共に働き、アイデアを分かち合える友達を見つけるようにする。子ども達が自ら共鳴できる種類の創作を見つげられるように支援する。そのため、子ども達が様々な種類のものづくりに参加できるように促す。

⑧遊び：作品のうまさ、そのものではなくプロセスを大切にす●「B・F」

最高の学習体験は、人がものづくりを行っている時に得られる。重要なのはものづくりが行われたプロセス。最終作品だけでなく、そのプロセスに注目する。

⑨遊び：プロジェクトの時間をたっぷりと確保している●「A・C・F」

子ども達の創造的なプロジェクトに取り組むには時間がかかる。時間制限することで、全体のアイデアが損なわれる。

⑩共有：マッチメーカー（仲介人）の役割を果たす●「E・D」

多くの子どもは、アイデアを共有したり、プロジェクトで協力したりしたいと思っているが、どうしたらよいかわからない。保育者がマッチメーカー（仲介人）の役割を果たすことで一緒に働ける他の子どもを見つける手伝いができる。

⑪共有：コラボレーターとして共に作品づくりに参加する●「A・E・G」

何をすべきか子どもに指示するのではなく、子どもと協力して作業することに全力を尽くせば多くの成果が得られる。そして、お互いの能力に対して新たな敬意を抱くようになり、関係が強化される。

⑫振り返り：振り返りの質問をする●「A」

プロジェクトに没頭するのは素晴らしいが何が起きているのかを振り返るために一歩退いて眺めることも重要。プロセスについて質問をすることで振り返りを促すことができる。

⑬振り返り：保育者の振り返りを子どもと共有する●「G」

保育者の振り返りを聞くことで、子どもは自分自身の思考に対する振り返りにより積極的になる。そして、それをどのように行うかについてのよいモデルを身につける<sup>31)</sup>。

そして、自己調整学習を構成する要素の一つである学生の模擬保育の関する事後の自己効力感をみるため、「実習でうまくできたこと、もっとうまくやりたかったこと、次回したいこと」等を記入にするアンケートの中に、鈴木伸一のストレス管理に関する研究における自己効力感の評価項目（「失敗に対する不安」・「行動の積極性」・「能力の社会的位置づけ」<sup>32)</sup>を参照に作成した

下記のアンケート項目を組み込み、最終15回目の講義の最後に実施した。(図5)

- ・「失敗に対する不安」=ミスするのではと、気になった。小さいミスでも、気になった。
- ・「行動の積極性」=前向きに取り組めた。  
=どうなるかわからなかったけど、最後までできた。
- ・「能力の社会的位置づけ」=自慢できる、得意なことがある。

人を笑顔にするパワーをもっていると思う。

実践・参観(どちらか〇) 題材名「  
保育者の授業へのチェックシート」グループ名「  
名前「  
」」  
子どもの創造力を育み、その可能性を最大限に引き出すために、保育者は下記の支援のプロローグの仕方についてどの程度、行っていた(行った)と思われるか。各項目について「1=とても」「3=まあまあ」「2=あまり」「1=いいえ」のうち最もよく当てはまるものを1つだけ選んで「O」で囲ってください。

①題材や作品例からできごとをイメージすることを喚起する例を見せている。(「何かできるのかな」「どこから手をつけるとよいかね」)	4 3 2 1
②シンプルなことだから、作ることをすすめる(簡単なものから始めて、望むようにできたことを確認してから、少しずつ追加)	4 3 2 1
③好きな道具(高材等)や材料を選ばせ取り組ませる(興味は学びのための燃料であることを大切にしている)・	4 3 2 1
④自由に材料を沢山、いじくり回すことを推奨している。	4 3 2 1
⑤何度も何度も失敗し、試してみようを促す(観察し、分解し、再構築しよう)	4 3 2 1
⑥つまみやすさ幅の広い種類の素材や作例等のアイデアを提供する(マテリアルの多様性が多いほど、創造的な学習活動が生まれる)	4 3 2 1
⑦友だちとの制作に積極的に参加できるように促す(興味ある種類の制作を見つめられるように支援)	4 3 2 1
⑧遊び・作品のうまさ、そのものではなくプロセスを大切に作る(最終作品だけでなく、そのプロセスにも注目)	4 3 2 1
⑨プロジェクトの時間をたっぷり確保する(創造的なプロセスには時間がかかる)	4 3 2 1
⑩マッチメーカー(仲介)の役割を果たす(一緒に働ける他の子どもを見つけて手伝いをする)	4 3 2 1
⑪コラボレーターとして共に作品づくりに参加する(指導者と子どもの双方が協力して作業することに全力を尽くす)	4 3 2 1
⑫振り返りの時間を取る(質問することで子どもの振り返りを促す)	4 3 2 1
⑬指導者の振り返りを子どもも共有する(教師の振り返りを話し、子どもの振り返りが積極的になる)	4 3 2 1

良い点や改善点がありましたら、お書きください。

図4 創造性に関する保育方法に関する質問

保育内容での模擬実習をふりかえりましょう。氏名( )  
実習をやって、さらにうかんだ、やりたかったことはなにでしたか

うまくできたことをおしえてください(絵でもいいよ)

もっと「こうしかった」ことがあればおしえてください(絵でもいいよ)

つぎに実習でしたいこと(つくりたい)ことがあれば教えてください(絵でもいいよ)

2)活動を終了した気持ちに近い項目に丸を入れてください。

- ・( ) 前向きにとりくめた・( ) ミスするのではと、気になった
- ・( ) 小さいミスでも、気になった・( ) 自慢できる、得意なことがある
- ・( ) どうなるかわからなかったけど、最後までできた
- ・( ) 人を笑顔にするパワーをもっていると思う。

図5 模擬保育後の振り返りアンケート

表3 振り返りシートの創造性支援を評価する項目と自己調整学習で育成する姿  
\*表の矢印は創造性支援の手法と関連の深いサイクルの下位課程項目を指す

		授業で創造性の支援を評価するチェック項目													
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	
		喚起する例を見せる	シンプルなことから始める	好きな道具、材料を選ばせる	材料をたくさんいじくりまわす	何度も何度も失敗して試してみる	つまみやすさ幅の広い素材や作例のアイデアを提供	友達との制作に参加を促す	作品のうまさだけでなくプロセスを重視	時間を十分に確保	仲介者の役割を果たす	共に作品作りに参加する	振り返りの質問をする	子どもと共有自身の振り返りを	
模擬保育の自己調整学習において目指すべき「学生」の姿	サイクル														
	予見	A 目標設定	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓
		B 方略計画	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓
		C 自己効力感	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓
		D 興味	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓
	遂行	E 注意への焦点化	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓
		F 自己揭示	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓
		G 自己モニタリング	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓
	自己内省	H 自己評価	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓
		I 原因帰属	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓
		J 自己反応	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓
		K 適応	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓

以上の創造性を引き出す保育者への13の質問項目と自己調整学習の循環的段階の下位過程との関係性を整理したものが表3である。この表3と図4・5の質問項目と幼児教育を担う教員に

求められる資質・能力との関連性を基に、次項において「循環的段階モデル」を組み込んだ学生の模擬保育を分析することで、その学習が教育的効果＝学生の自己調整能力や教員に求められる資質・能力へどのような影響を与えているかを明らかにする。

### 3. 実践事例の分析

#### 3-1 実践事例の概要

- ・対象：園田学園短期大学2年コース2年生、10名

実習経験・・・1年次保育実習Ⅰ（2024年11月）

1年次施設実習（2025年1月「養護施設等」～2月「発達支援」）

2年次幼稚園実習（2025年6月）本演習授業の9回目終了後に1か月間幼稚園（3歳から5歳）実習を経験し、その後に、本模擬保育を実施。

- ・実施教科：保育内容（演習）造形表現 A

- ・実施時期：2025年7月1日（演習10回目）～7月29日（演習15回目）

- ・実施場所：園田学園大学1号館2階、図工室

・実施目的：保育の「表現」領域について、そのねらいや内容、その取扱いについて十分に理解すると共に幼児の発達段階に応じた保育内容や環境づくり、幼児の表現を援助する専門的な手法を他者と協働しながら学習する。そこでは、子どもの活動する姿だけではなく、自身の保育者としての姿もイメージしながら、幼児の主體的・対話的で深い学びを実践の現場で具現化できるように保育構想・実践力に関して演習（模擬保育等）を通して高める。

#### 3-2 実践事例の内容

##### 3-2-1 模擬保育の保育案の作成とグループ分け

実践事例は7月1日（10回目）に、保育指導案の計画の仕方を学んだ後に、図6の左端のような簡易型の保育案を書き、7月8日（11回目）の保育の記録と評価の授業後に、前回の簡易型の内容を基に、個人の下記の種類保育案（図6中央）を作成した。

○魚釣りゲーム⇔じゃばら青虫づくり・海の生き物づくり・じゃばら足の深海クラゲ

\*海、または、生き物つながりでグループを構成した。

○ハロウィンコスプレづくり⇔オニの帽子づくり・クリスマスツリー

\*季節の行事に関わる内容でグループを構成した。

○双眼鏡づくり⇔紙コップのロケットづくり・すてきな街の乗り物をつくろう

\*遊びに使うもの（工作）でグループを構成した。

それを7月12日（12回目）までに指導者がその指導案を基に、「ごっこ遊び」、「季節行事に関わる造形」「工作：使うものを作る」のグループ分けをおこなった。12回目にデジタル機器を使った造形表現についての講義を聞いた後、グループ分けの提案を行った。他のグループへの移動

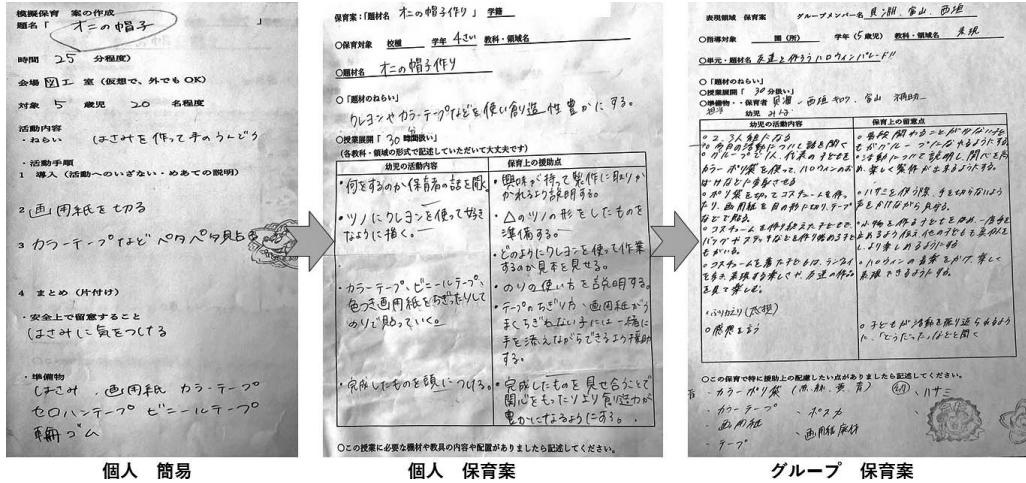


図6 個人(簡易・保育案)からグループ保育案

可としていたが、提案どおりのグループとなった。そして、実際に行う下記の種類の保育案を作成した(図6右端)。13回目(7月15日)は、造形遊びの活動例と評価についての授業後、グループごとの領域「表現」の保育教材の準備(作成)と練習を行った。

- ② (7月22日) 魚釣りゲーム：保育者4名(進行2名・補助・記録2名) 子ども役5名
- ② (7月22日) 友達と作ろうハロウィンパレード：保育者3名(進行・補助・記録) 子ども役7名
- \* 絵の保育事例と評価についての講義に模擬保育、各模擬後に、図4のアンケートを実施
- ③ (7月29日) 双眼鏡を作ろう：保育者3名(進行・補助・記録) 子ども役7名
- \* 7月22日の保育者・子ども役の評価を提供しその傾向を説明、その後工作について保育事例と評価について講義後、模擬保育を行う。事後、図4と図5のアンケートを行う。

### 3-2-2 模擬保育の活動の流れ

表4は、各実践後の保育士役と子ども役の授業への感想の一覧である。学生全員が出席し、図4のように子ども役の感想内容も充実している。「ハロウィンパレード」の保育実践の際の授業の流れを図7に示す。

### 3-3 実践事例の分析


#### 3-3-1 創造性を引き出す支援に関する自己調整学習力の様相

ここでは、子ども役の創造性を引き出す支援への他者評価・自己評価の結果に関して表3を活用して、自己調整学習の循環型学習システムの「予見・遂行・自己内省」を構成する、どの段階のどの下位要素に拘って模擬保育を展開していたかを読み解く。また、この予見は主に動機付け、遂行は行動、自己内省はメタ認知に対応していると考えられるため、それを考慮しながら、図2のように「メタ認知、動機付け、行動」に関連する幼児教育教員に求められる資質・能力を


表 4 各模擬保育後の子ども役・保育士役の感想

保育題材名	子ども役の感想	保育士役の感想
魚釣りゲーム	<ul style="list-style-type: none"> <li>・花紙とは、どんな紙なのか実際に見て触ったりすることで、興味が高まったと思う</li> <li>・やっていけないことを説明して分かりやすかったです。制作中に沢山褒めてくれて作っていて楽しかったし、作った魚を釣って遊ぶまでであった展開がおもしろいと思いました。</li> <li>・魚つり楽しかった。</li> <li>・子ども達も楽しんでできると思う</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・みんなが楽しく一生懸命取り組んでいる姿を撮影しました。カメラに収めることができて良かったです。子ども役に声をかけがあまりできなかった部分が改善点です。</li> <li>・説明する人と同じ人ばかりだったので、サブの保育者は、どんなサポートができるのかもっと考えるべきだった。</li> <li>・授業者の方がスムーズに進めるように補助に周り行動しました。また手が足りないと感じたときは授業者側にまわったりしました。</li> <li>・どのような流れで進めていくのか話し合いが少ししか出来なかつたため、もう少し話し合いをすべきだったと思いました。子ども役の人たちが楽しそうに遊んでくれて良かったです。</li> </ul>
友達と作ろうハロウィンパレード	<ul style="list-style-type: none"> <li>・まずお手本を見せてどのように作るのか、前でやってイメージしやすくていいのが、とても楽しかった</li> <li>・難しい部分は一緒に手伝ってくれたりしたので良かったです。もう少しハロウィンの衣装をつくる時間がほしかったです。とても楽しかったです。</li> <li>・考えたり、オリジナルデザインで楽しむことができて良かった。声かけも、盛り上がりやすかったです。</li> <li>・色や材料が沢山用意してあり楽しく活動することができました。リボンの作り方の質問に対して答えてくれたり、とても良かったです。説明も分かりやすかったです。</li> <li>・子どもが好きな物を使えるようにたくさん材料が用意してあり、オリジナルの物が作れてよかったです。</li> <li>・子ども達が好きな動物などコーディネートしたり モデル役に分かれて、どちらも楽しめたのがよかったです。</li> <li>・様々な道具を準備していて、色んな表現をすることが出来ました。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全体説明は任せきりだったので、子ども役の一人一人に「できて、手伝わなければならない」と声かけをサポートを心がけるようにしました。ハロウィンのイメージを絵や画用紙で表現し、衣装にしているのが印象的でした。</li> <li>・記録として、よい写真がいっぱい撮れた。みんな可愛い衣装を作っていて、すごいと思う</li> <li>・音楽をかけるのを忘れた。狭い場所で作成していたので、作業する机を指定すれば良かった。材料は前に、取りやすいように置くべきだった。</li> </ul>
双眼鏡を作ろう	<ul style="list-style-type: none"> <li>・トイレットペーパーの芯にお絵かき楽しかった。カラーセロハンが綺麗だった。</li> <li>・声かけが良かった</li> <li>・1つずつ丁寧に進めており、全員が出来たことを確認してから説明を始めていたのが良かったと思いました。また、同じ色のペンを増やしてほしいと言ったときすぐに対応してくれて嬉しかったです。名前を書く場所を指定していて良かったです。</li> <li>・3人で協力して、声かけもできて、内容もスムーズに進めれていた。</li> <li>・子ども達が楽しんでいる所を褒めたりしてくれ嬉しかったです。</li> <li>・作品をオーバーに笑顔でリアクションしてくれてとても嬉しかったです。危ないことは危ないと言っている部分があったです。</li> <li>・一緒に保育者の方も楽しんでコミュニケーションをとりながらやってくれて楽しかった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子ども達があり楽しそうだったので、もう少し面白いくふうが必要だと思った。さらなる展開があったら良かったと思いました。</li> <li>・導入でカラーセロハンを配り、子どもが興味を持てるようにしているのが良かったです。竹竿でセロハンをプスプスを開けるのが楽しかったです。班の中で役割分担をできていて良かったです。</li> <li>・道具の注意点が出来て折らず、実際に色々怪我がおきる可能性があったかと思う。それぞれの注意点を考える必要がある。</li> </ul>


**題材名「友達と作ろうハロウィンパレード」**  
**目標「様々な素材を使い、自分なりのハロウィンコスチュームづくりを楽しむ」**  
**(導入)**  
 ①2・3人の組になる。誰を変身させるか決める  
 普段関わる事が少ない子どもがグループになれるようにする。  
 ②活動や準備した材料について説明し、関心を高め友達と楽しく製作ができるようにする。



**(展開)**  
 ③グループごと一人の子どもをカラーポリ袋を使ってハロウィンのお化けに変身させる。  
 ・ポリ袋を切ってコスチュームを作る。(ハサミを使う際は手を切らないように、声をかけながら見守る)



・コスチュームを作り終えたときは、バックヤステッキを作り始めるように促す  
 ④コスチュームを着た子ども達は、ランウェイを歩き、表現する楽しんだり、友達作品を見て楽しむ。



⑤教師より、活動において、説明場面や、子どもへの関わり方について、動画を通して良いところ等に説明を受け、個々でリフレクションし、振り返りカードに記入する。




図 7 友達と作ろうハロウィンパレードの模擬保育の活動の流れ

どのように発揮していたか、さらに、Linda B. Nilson の指摘したこの学習の効果も読み取る。

図 8 の「好きな道具・材料を選ばせる」「イメージを喚起する例を見せる」「仲介役の役割を果たす」等の項目がすべての実践で 100% の評価となっているように、子ども役にとっては、予見（目標設定）（方略計画）＝動機付けに関連する「例を提示する」等の丁寧な活動のねらいや、作例のよる作り方の説明、豊富な材料を用意して、それを自由に選択させる手立ては、非常に高評価だった。それは、図 10 に「説明」がネットワークの軸になっているように、工夫された導入への好意的な感想が多かった。そこから学生が「予見」のプロセスを大切にすることが読み取れる。また、表 4 の「難しい部分は支援」したり「危険なことはしっかり説明したり」と、遂行



や仲介者の役目も果たしていたと思われる。

一方、図9の保育士役が自身の保育内容を自己評価した結果を見てみると、「振り返りの質問をする」等の全体的に自己内省＝メタ認知に関わる子どもとの振り返り等のプロセスへの評価は、魚釣りが釣りゲームをしながら感想を聞いていたのに比べ、他の2つは60%台と低かった。これは制作に時間がかかり、特に双眼鏡グループは、「子ども達があまり楽しそうでなかったと思ったので、もう少し面白いふうが必要だと思った」と述べているように、手本のように作成させたい、千枚通し等で怪我をさせてはならないと焦ってか、遂行における他者との交流も60%台と低い自己評価だった。全体的に「時間内で終わらせたい」という焦りで相互交流や振り返りの時間を設けきれないことが、「内省的で責任感を伴う専門意識の発達」の場を作り切れなかったことに繋がったと思われる。ただ、保育士役の自己評価は70から60%台の低い項目もあったが(図9)、「狭い場所で作成していたので、作業する机を指定すれば良かった。材料は前に取りやすいように置くべきだった」「どのような流れで進めていくのか、もう少し話し合いをすべきだった」と準備段階や他者との協働に関する自分たちの改善点を把握している点は、遂行の自己モニタリング、自己内省(メタ認知)の原因帰属や自己反応、適応はできており、「内省的で責任感を伴う専門意識」を発揮し、表2の「自己調整レベル」の内容も含んだ「自己制御されたレベル」には達していると考えられる。そして図2の関係性にあるように「幼児理解を深め、一人一人に応じる」「保育を構想」「豊かな体験を創り出す」「他と連携し、協働する」「カリキュラム・マネジメント」等に関する資質・能力も、模擬保育に「循環的段階モデル」を組み込むことで高めることができる可能性を見出した。

### 3-3-2 授業後の模擬保育振り返りカードに見る自己効力感の様相

図12は、自己効力感に関するアンケート結果である。これを見ると、事前の実体験やグループで他者と支え合いながら模擬保育を展開し、作品も完成させたことの達成感。また、毎回、指導者より図13のような動画を示しながら「困っている子に、近づき声かけ、手助けしていたね」良い点を指摘したり、次の授業冒頭で図8・9のアンケート結果の提示と説明を行ったことで、自分たちの模擬保育の改善点を共有できていたので保育への不安感へ低かったと思われる。

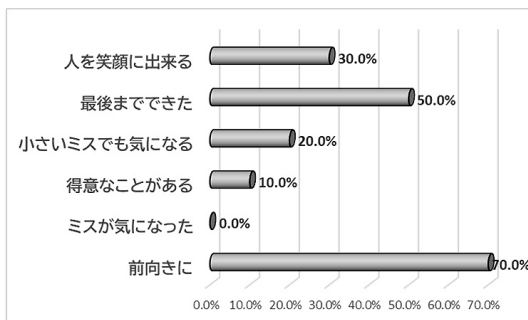


図12 自己効力感に関するアンケート結果



図13 指導者がよい点と指摘した場面

表5 演習の授業での模擬保育のふりかえりシート感想（うまくできた、こうしかなかった）

うまくできたこと	子ども達が楽しそうに制作して、その後も楽しそうに魚釣りしていたので良かったです	楽しそうに魚釣りをしている様子や釣れた喜びを写真や動画に納めることができた。	釣りの絵	釣り竿を作る時に1本の紐では細かったので、3本の紐を束ねて三つ編みにしました。強度や太さにこだわりました。タコやウラゲを作る際に、形が似ているため見ただけでどちらかが分かるように材料を変えたり、足の長さを変えるようにした。	ナイロンテープでリボンを作ってみました。子ども役の子にもナイロンテープでリボンの作り方を指導できました。	皆、可愛いおばけを作っていた。最後の締めが良い感じにできました。	カメラでかわいいみんなを納められた。	持ち前の発想力を活かしてアイデアをしばりだせました。	カーセロハンで導入	トイレットペーパーの芯が足りずにすぐに取りに行き、見本用の双眼鏡を作った。子どもの目線になったはなしかけていたこと。
こうしかなかったこと	もっと振り返りや子ども同士のコミュニケーションをとる時間を作ったりしたかったです。	海や川など水の音を流せばよかった。色々な面角から撮影すればよかった。	もっと色々な魚の種類やワカメなど もっと海の世界観をだしたいなと思いました（伏しいかやサメなど）	時間や人数が足りなかったので、海の生き物の種類や量が少なかったため、もっと釣りを楽しめるように種類や量を増やしたかったと思いました。また、小さいサイズの海の生き物や大きなサイズの海の生き物を作った方が楽しめたと思いました。	机を指定して制作できるようにする。	どの場所でするか指定すればよかったです。音楽をかけたかった。小物をつくる時間もほしかった。	子ども役のみんなともう少し関わりました。	笑顔の絵	申し越し色んな子どもと関わるため話しかければ良かった。道具の注意点	面白み、自由度を増やせば、子どもたちと実際にやった時に楽しいと思える制作になったと思いました。

自己効力感の「行動の積極性」に関して、表5で「子ども役の子にもナイロンテープでリボンの作り方を指導できました」と述べているように、指導への達成感から「前向き」が70%と他と比べて高い達成率だった（図12）。ただ、自身の「社会的能力の位置づけ」に関しては、こうしかなかったことに「もっと振り返りや子ども同士のコミュニケーションをとる時間を作ったりしたかった」とあるように、しっかりした自己内省（適応）ができていないものの、それが「自分はこれで人に役立つ」という自信にはつながっていなかったように思われる。いかなれば、保育者に必要な資質・能力の「自ら学ぶ姿勢と、教師としての成長」に関して、学ぶ姿勢はあるものの、自身の保育者としての成長を実感できていないのかもしれない。この点において学生の実践は「自己調整されたレベル」に至っておらず、それをどう改善するかという課題が残る。

#### 4. 今後の取り組みについて

##### 4-1 自己調整学習の循環型学習モデルを組み込んだ「表現」領域の模擬授業の成果

模擬保育の学生の体験の意義について研究している桐川敦子らのグループは、実際の子どもの参加が不可能であり、学生が子ども役や保育者役を行い展開される模擬保育において、学生たちが模擬保育を成立させるため、子どもの立場を考える試みに力を尽くしていたことを明らかにしている<sup>33)</sup>。

確かに本研究の模擬保育においても図11の「子ども」の「思い」を核に保育を予見（計画）していく姿勢は、「答申」で示された「これからの教員に求められる資質・能力」の1つである「幼児理解を深め、一人一人に応じる資質・能力」という今後の自己調整しながら保育を学ぶ学生にとって根幹となる、幼児理解をベースにした「子どもから学ぶ」という内的基準の育成につながると思われる。その意味において、前項で指摘した自己調整力の向上と共に「循環型学習モデル」を組み込んだ「表現」領域の模擬授業は、学生の「幼児理解と個々への適切な対応」という保育実践力を引き出し、高める可能性があると思われる。

#### 4-2 課題点、その改善の方向性とは

ただ、前項で見出した自己調整されたレベルに至らない要因と思われる自己効力感の低さは「研修ガイド」で新規採用教員が保育者効力感、保育実践力の自己評価が低さに通じるとされる。この課題点を解決する方向性として、模擬保育のふりかえりシート感想（表6）で「手に絵の具をつけて紙に手型をつけていく制作。全体で一つの制作に取り組むものをしてみたい」と具体的に子ども達が喜ぶ姿をイメージして、今後の活動を考えていることから、その「子どもの立場・思いを重視する」=「子どもから学ぶ」意識を大切に模擬保育を指導すべきと思われる。

その点において、本研究でのグループの保育案は、グループ内の一人の保育案をそのまま引用、ブラッシュアップしたものだった。そのため自分の題材が選ばれた学生と、その他との間に「想定した子ども像」を具現化することへの意欲の差が生まれ、それが自己効力感の低さの要因になっていた可能性がある。したがって、子どもの立場を重視し、その良さを引き出す模擬保育をグループ作成も含め、討議する場（時間）を設ける必要があると考えられる。

加えて、明らかにしたいのが、模擬保育と実習との関係性である。図14は、昨年（2024年）秋に3年コース2年生（35名）の子ども役30名、保育士役5名で「貼り絵」を題材に行った模擬保育の結果である。これを見ると2年コースと比べて全体的に保育士役の自己評価は高い、こ

表6 演習の授業での模擬保育のふりかえりシート感想（さらに、次にやりたいこと）

活動内容	釣り	釣り	釣り	ハロウィン	ハロウィン	ハロウィン	双眼鏡	双眼鏡	双眼鏡	
実習をやった、さらにやりたいことは？	もう少しタコや魚 クラゲ以外にも種類をふやしたら、もっと楽しめると思いました。	カメラを担当したため撮ることで一杯声かけがあまり出来なかったのも、もっとちゃんと見て声かけすればよかった。	魚釣りをしたため釣るだけになってしまっていたので、子ども達が、どんな遊びがしたいか聞いたり、ゲームを取り入れたいと思いました。	ハロウィンの衣装を作ってみて、他の行事にも応用が出来るなと思いました。ハロウィンだけでなく、七夕やクリスマスの衣装にもできるなと思いました。魚釣りもした後、みんなで作った魚を飾ることができそうな水族館にリメイクしても良いと思いました。	電気を消してランプナウェイや音楽にのせてハロウィンを感じるようにゴミ袋にミニライトや光る物を貼れるようにしても良いと思った。	もっと声かけをすればよかった。様々な素材をつかるように配置の仕方考えるべきだった。	ハロウィンの衣装を作ったあとファッションショーができなかったからやりたかった。	子どもの見えて！に応募して一緒に楽しむ	準備が丁寧でできたこと	もっと面白さとか、たくさん移動してくれたら、とても良かったと思います。どうしたら魅力を引き出せるのかもっと学ぶべきだと思います。
次にやりたいこと	秋に実習があるので、季節にあった制作をもう少し考えてやりたいです。	もっと個性が出る作品ができるような活動したい。	色々な魚をつくりたい	手型を使って木の絵を作ってみました。手に絵の具をつけて紙に手型をつけていく制作です。全体で一つの制作に取り組むものをしてみたいと思いました。	鬼のパンツ 2月 1月に作って子どもみんなではく。	壁面制作 みんなで大きなものをつくりあげる。	季節に見合ったことをしたい。鬼の面を作りたい(節分)	水族館したいです	作り終わった後、一緒に遊ぶ物	大きい画用紙に自由に子どもの「好きなもの」をテーマに描いて白い部分をなくす。

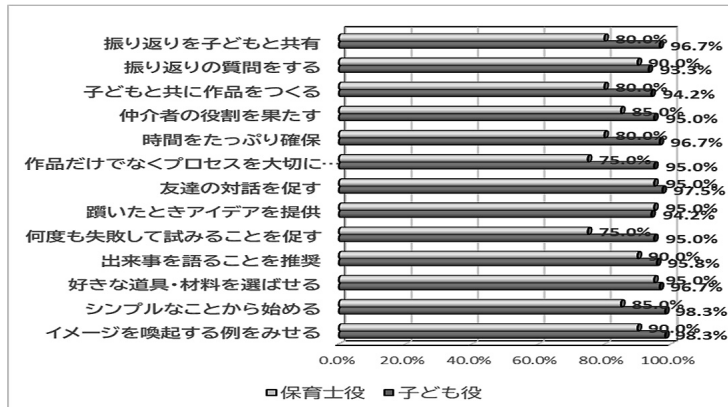


図14 幼稚園実習を経験していない学生の模擬授業の創造性への支援の自己評価

の3年コースの学生は0歳から2歳児への保育は経験しているが、題材対象の3歳から5歳児の幼稚園実習は経験していない。保育経験が模擬保育の自己調整学習、特に「子どもから学ぶ」等の意識にどのように影響するかも検証・考察していく必要があると思われる。

今後は継続的にこの課題解決の実践的研究に演習の授業の中で取り組み、学生の保育実践力と共に保育者効力感の向上を図っていきたい。

#### 註

- 1) 中央教育審議会, 2022, 『『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～『新たな教師の学びの姿』の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～(答申)』, 文部科学省, p.22, [https://www.mext.go.jp/content/20221219-mxt\\_kyoikujinzai01-1412985\\_00004-1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20221219-mxt_kyoikujinzai01-1412985_00004-1.pdf) (2025年8月11日取得)
- 2) 中央教育審議会, 2024, 『『令和の日本型学校教育』を担う質の高い教師の確保のための環境整備に関する総合的な方策について～全ての子どもたちへのよりよい教育の実現を目指した、学びの専門職としての「働きやすさ」と「働きがい」の両立に向けて～』, 文部科学省, p.12, [https://www.mext.go.jp/content/20240827-mxt\\_zaimu-000037727\\_01.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20240827-mxt_zaimu-000037727_01.pdf) (2025年8月10日取得)
- 3) 保育教諭養成課程研究会(代表:無藤隆), 2016, 「平成27年度文部科学省委託 幼児教育の質向上に係る推進体制の構築モデル調査研究『幼稚園教諭・保育教諭ための研修ガイドⅡ－養成から現場への学びの連続性を踏まえた新規採用教員研修－』, 保育教諭養成課程研究会, p.16, [https://www.youseikatei.com/pdf/20160202\\_2.pdf](https://www.youseikatei.com/pdf/20160202_2.pdf) (2025年8月12日取得)
- 4) 同上
- 5) 桐川敦子・櫻木真智子・黒澤寿美・望月久也・森田陽子・梁川悦美, 2018, 「模擬保育形式の授業における学生の体験－運動遊びの実践を通して－」, 日本女子短期大学, p.185, [tps://jwcpe.repo.nii.ac.jp/>nichijo\\_kiyo48-17](https://jwcpe.repo.nii.ac.jp/>nichijo_kiyo48-17) (2025年8月16日取得)
- 6) 前掲書, 中央教育審議会(2022), P.5
- 7) 伊藤崇達, 2009, 『自己調整学習の成立過程－学習方略と動機づけの役割－』, 北大路書房, p.4
- 8) Barry J. Zimmerman & Dale H. Schunk, 2014, 「第1章 自己調整学習:序論と概観」『自己調整学習ハンドブック』, 北大路書房, p.1
- 9) 伊藤崇達, 2012, 「自己調整学習方略とメタ認知」『自己調整学習－理論と実践の新たな展開へ－』, 北大路書房, p.32
- 10) 保育教諭養成課程研究会(代表:無藤隆), 2022, 「令和3年度「幼児教育の教育課題に対応した指導方法等充実調査研究－幼稚園における指導の在り方等に関する調査研究－『『幼児教育を担う教員に求められる資質・能力を高める研修モデルの開発』』, 保育教諭養成課程研究会, pp.15-16, <https://youseikatei.com/pdf/20220523.pdf> (2025年8月6日取得)
- 11) 木村昭憲, 2022, 『主体性を育む学びの型－自己調整, 探求のスキルを高めるプロセス』, さくら社, p.11
- 12) 前掲書, J. Zimmerman & Dale H. Schunk (2014), p.1
- 13) Barry J. Zimmerman, 2007, 「学習調整の自己成就サイクルを形成すること:典型的指導モデルの分析」, 『自己調整学習の実践』, 北大路書房, P.1
- 14) 塚野州一, 2012, 「自己調整理論の概観」, 自己調整学習研究会, 『自己調整学習－理論と実践の新たな展開へ－』, 北大路書房, p.6
- 15) Barry J. Zimmerman, Sebastian Bonner, Robart Kovach, 2008, 『自己調整学習の指導－学習スキルと自己効力感を高める』, 北大路書房, p.2
- 16) Zimmerman, B. J. (1989). A social cognitive view of self-regulated academic learning. *Journal of*

- Educational Psychology, 81(3), 329-339.
- 17) 前掲書, 伊藤 (2009), p.17
  - 18) 前掲書, J. Zimmerman & Dale H. Schunk (2008), はじめに
  - 19) 嶋田祐介・橋本忠和・鈴木淳, 2023, 「教師の自己調整学習を促す校内研修についての研究－自己調整の循環的段階モデルを用いて－」, 北海道教育大学紀要 73 卷 (教育臨床研究編 1 号), p.236
  - 20) Barry J. Zimmerman, 2007, 「学習調整の自己成就サイクルを形成すること：典型的指導モデルの分析」, 『自己調整学習の実践』, 北大路書房, p.2
  - 21) 前掲書, 伊藤 (2009), pp.4-5, 原書は, 前掲書, Barry J. Zimmerman (2007), pp.2-3
  - 22) 上書, p.5
  - 23) 上書, p.4 の図 Figure1-2 を参照に筆者が作図
  - 24) 前掲書, Zimmerman (2007), pp.3-6
  - 25) 前掲書, 伊藤 (2009), p.5 の図 Table 1-1 を参照に筆者が作図
  - 26) Linda B. Nilson, 2017, 『学生を自己調整学習者に育てる－アクティブラーニングのその先へ』, 北大路書房, p.13
  - 27) 文部科学省, 2018, 「幼稚園教育要領解説」, p.223, [https://www.mext.go.jp/content/1384661\\_3\\_3.pdf](https://www.mext.go.jp/content/1384661_3_3.pdf) (2025 年 8 月 25 日取得)
  - 28) ミッチェル・レズニック, 2018, 『ライフロング・キンダーガーデン－創造的思考力を育む 4 つの原則－』, 日経 BP 社, p.34
  - 29) 上書, pp.283-291
  - 30) 上書, pp.274-281
  - 31) 上書, pp.266-267
  - 32) 鈴木伸一, 2002, 「ストレス管理」, 『セルフエフィカシーの臨床心理学』, 北大路書房, p.104
  - 33) 前掲書, 桐川敦子・櫻木真智子・黒澤寿美・望月久也・森田陽子・梁川悦美, p.185

---

[はしもと ただかず 美術教育]